

[別紙 2]

審査の結果の要旨

氏名 吉田 敦行

本研究は、マイクロアレイ、リアルタイム RT-PCR、免疫染色という三つの発現解析手法を用いて、乳癌組織におけるエストロゲン応答性遺伝子とタモキシフェン療法の奏効性の関連を解析したもので、下記の結果を得ている。

1. 乳癌系培養細胞のマイクロアレイにより得られたエストロゲン応答性遺伝子群より選ばれた 11 個の遺伝子の乳癌組織における発現パターンをクラスター解析により検討することで、患者群の明瞭な分類と遺伝子群の発現パターンの相関が示された。
2. 上記実験に用いられた遺伝子より 3 個を選び、その発現を免疫染色により調べ、タモキシフェン療法の奏効性との関連を調べた結果、それらの組み合わせが、タモキシフェン低感受性である患者群を同定することが示された。

以上、本論文は、タモキシフェン療法の新たな効果予測の手段を提示した。本研究は、培養細胞のマイクロアレイ研究を基礎に診断因子の確率を目指した、トランスレーショナル・リサーチであり、また、近年の著しい内分泌療法の発達に鑑みて、治療効果予測因子研究の進展に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。